仙洞詩合　乾元二年四月廿九日

題

春風　夏雨　秋露

冬雲　戀夕

作者

左

女房

前権中納言平朝臣経親

従二位藤原朝臣兼行

散位藤原朝臣為相

右近衛権中将藤原朝臣俊兼

右

前権中納言藤原朝臣為兼

左近衛権中将藤原朝臣家親

永福門院内侍

右近衛権中将藤原朝臣兼春

新宰相

従一位藤原朝臣教良女
藤大納言典侍
延政門院新大納言
永福門院小兵衛督
永福門院中将

前権大納言藤原朝臣家雅
入道前太政大臣
従三位源親子
前権中納言藤原朝臣俊光
九條左大臣女

講師

読師

判者
衆議
隠作者名被判之
前中納言為兼卿　後日書判詞

一番　春風

左　勝　女房

あさやいふ吹ふのなかめしけぬをかへのにほひは風てらぬ

右　前権中納言藤原朝臣為兼

はるといへは梅やさくらのにほひきて風ありけきむ月さうき

左右共講了各可申其難之由被仰下
頗以有感歎之由無発言于時重自東座云
申不可然之由有其沙汰一番左可被賞
然而両方歌之誠於心深姿詞雖
及左可為勝之由定申給了

二番

左　持　　前権中納言平朝臣経親

かすか山みねの松の春日はなれしてかはらぬ色に風のおときく

右　　左近衛権中将藤原朝臣家親

心とはゝのとかなりて吹さそふあらしもて花のさけるへきかな

左歌はけしきのさはやかに聞ゆ右はよろしからす
なさけありてもなすかた〈〈すて為持よし
定られ侍る事

三番

左　勝　　従位藤原朝臣為忠

うすくこき霞てつゝむ花の色をとちるをみね桜にさそふ春風

右　　永福門院内侍

朝きよめ庭の桜をふきたてゝ木の下くもる春の夜の霞

為相朝臣申云右哥先年為兼卿中
三嶋社十首に木もとの霞を吹あらはして
一くもりもなき松の下陰とよみて侍る哥に似
侍るにや歌によりて聞けるにいへとも
たりと侍ていたる為勝

四番

左　　散位藤原朝臣為相

さきぬつる山乃桜ハ枝さしてまつみのとかやくる二月かせ

左　勝　　　左近権中将藤原朝臣兼春

明わたる霞もはれぬほのかにも朝の桜ハ風そかよへり

左哥たちなれし花葉なかき枝おもし

き心ところ不叶にのよし為右勝に

申之されとあさき山乃桜ことけゝらし人

両様不可相分之由雖左方両方不明風情

難定なきにあらし申侍く以右

為勝

五番

左　持　　　左近権中将藤原朝臣俊通

かくしもて花の梢に吹かれて風もおもへき吾道

右　　　新宰相

いとゝ吹くよそのはいかなる春風の花吹ちらすはなし

春の花にて吹かれく花の木もとおもへの

らの後しろと吾花のしいたんとや

ことく何れとこゝろさしのはいつれ

何とはけなるや右も心ある様に

見しなりの下句これもあかれつと

葉何と何れハ様とかくあらハ侍き

六番

左　　　従一位藤原朝臣教良女

霞わたる霧のたえまのこりそめて柳よりつきる春風

右　持　　前権大納言藤原朝臣家雅

風雅
あくとなきさ霧の下風春風に花の香ふきさやかなれ

左霞わたるよりて末句の風とかへて侍
哥合には一様に可為持朝臣申之
仍以右為持

七番

左　勝

一藤大納言典侍

梢よりこきまぜ花をちらしたて山本わくる春の夕せ

右　　　入道前太政大臣

まれなる花を尋ねこのまに咲く花もちるる春風に

左哥花を見ることよりも各申之右も心わ
かれく宜しと侍れどもまことに新花を
ちらさすて山すそわくる河風にもかたき
おしかは人に侍べき様にはかなき
殊勝侍るよし

八番

左　勝

延政門院新大納言

あはさりの風のけしきも柳の糸にみたれてなひく

右　　従三位源親子

花は吹柳はなひくさはかりの春の情は風のみそしる

左　奇

心あるとはなけれとゆふ風によしあしなひく糸

うちはらふ風のしつゑは吹はらて間よりそ

やとれる花のした帰り行

九番

左　持　　永福門院小兵衛督

緑あさき庭の柳にふきかよふ春風ならて誰かしる

右　　前権中納言藤原朝臣俊光

さくら花ちるをは見すてゆく春風

雨そふるさはかりて為持

十番

左　持　　永福門院中納言

よも山のかすみわたりて春くれは柳にすきる春風

右　　九条左大臣女

なへて世にゆくとも見えぬ春風も柳の末ぞひくかたもみる

たをやかの柳の風は心してこのもかのもにかよふなり

よしなのくれ為持

十一番　春雨

左 勝　　女房

緑なる庭の木かけの夕すゝみ暑さはすてし秋の夜

右　　為兼卿

秋ちかき軒は松風ふきそよきに村雨過て風のすゝしさ

庭乃木かけの夕すゝみおもしろく聞え侍るを

ためつらしくや侍らむ侍れと

左歌始末の句なとよろしく聞え侍れは

猶よろしきのよしにて為勝

十二番

左

勝

経親卿

風雅
あふち咲梢に雨はやみなからそのあやなしに聞ゆる軒の

右　　家親朝臣

むら雨の音は軒はの下にたえて残る松の下かけにのみ

村雨の跡に残れる雨の露をこそみれ侍れた

上の句尚おもしろくも侍るよし各申して持

侍りき

十三番

左

持

兼行卿

都にはまたき雲まに残るらむ

右

内侍

行暮のなき旅寝に立よりて見るにすこしたらぬ旅人
心ある月にてはさらになにしにかやとる
たれしるらんやとおもふのくも侍らぬならすや
ことにたちの旅人は勝るへくよし
申て持と定らるれ侍るへき

十四番

左　為相朝臣

晴やらぬ日数はかりを経てゆく夜はおほろやさ月の空の

右 勝　範春朝臣

夏草のみちのへの葉末をわけてなけく姿はみるにはすき

左のうたはみよしのゝ月を見ましよと思ふよせつらく
て夷送の舞や枕一為勝ことに各
侍るへき

十五番

左 勝　俊兼朝臣

露おもるさゝの葉の末一本で夜の木くさをたれの

右　新宰相

村雨のなごりもおもしろくみの葉は涼しきに秋の夜侍る

左歌の作者しみて秋を思ひし事

まことはこれ不叶や侍へきことなめく

よろしく以左為勝

十六番

左　勝　　従一位藤原朝臣女

涼しさを思ひしらるゝ夕されは竹の葉風のかよふ庭の里村

右　　家隆

山のたゝそれ庭にそひく村の梢のすゑにかりける夜は

木末のにほふかりける夜は絶ゆるかおなしほつれきよし各申侍しうへ左を

よろしき由に侍りて勝侍るさ

十七番

左　　藤大納言典侍

おきあかす萩の葉末よりやさしみ夜のあさけの庭そ涼しき

右　勝　　入道左大臣

峰越のとほの村立雨すきて緑もうすき外山の松

左右よろしくして緑もうすき外山の松

よし各申侍しまされのむらさめ

ましてみとりもうすき外山の心

ちらして松夜さうへくやとて為勝

十八番

左　　新大納言

卯月のゐ日数のかくしよめかそていや有明にこそ つきけれ

左　勝　　従三位親子

枝しけきなる葉の本に庭よめて月こそ秋の夜のかけ

左卯月の日数といひしや有明の

なごりはかりの寓しき見ゆる亦なきに

あはれと左の哥勝りとしてあはしく

以左可為勝由被定申侍き

十九番

左　勝　　小兵衛督

郭公まちもやとおもひつる夜の名残はさよはいかにしのゝめのそら

右　　俊光卿

うちこえてあり明の月に夜半のかけすゝしさに秋の庭

名残の夜よ稲妻の影たるらしく

左のゆうしくあはれにして勝侍りき

廿番

左　勝　　中将

そそそむるゆふべの雨のなごりにかれは涼しき秋の枝

右　　九條左大臣

緑こき花の山の晴かねてそらのかけ有明の月

そらのかけ有明の夜アリテ入道斎

あはれなるよし藤原朝臣に
まて侍るへきそある夕風雨になれ
うるま影の枝よりかへるもかうて優よ
おもしろきこ趣とし侍りまさ

九十一番

左 勝 秋露 女房

玉葉
秋しられし草木の心にてもらし秋風ふかれて露くたる比

右 為兼卿

を露なりしく萩の花はなそよめかすまてとはれ秋の露ね

左心詞をふくみりして端凡俗と勝右

奇にふるをしつれよし再之中
紛しをゆるよそて持の字をはなされ
さくりまさ

九十二番

左 勝 経親卿

なる風葉より落る露にふるまとへのさむしろかき夕くれ

右 家親朝臣

夕くれ花ともいつし朝あさ風なまよなすもの秋の空むら
なる風葉の露乃音こそ雨きそ夕れ
東宮くはしなを時も易とおもへ

ならひとていつもの秋とさこそ思ふ事
おほつかなさより人々歌さ朝の
の歌よなりけるといへる心あるさは
ありとて持よ何にても侍りき

廿三番

左　　　前納言

しらしらむ花もよのまに姿して主る風にぬ萩の朝

右　勝　　　内府

音わける朝菊の籬にしもありや持よあらん為夜の露

しらしらむ花も秋のよにおもしろくすて

判しかるとた句御製にてり紀緒よし
各やかてはんたる揺

廿四番

左　持　　　為相朝臣

妹いろいく秋の夜も袖はさら月のやちとかはらん
さそ

右　　　範春朝臣

音うすき朝の原は宮のうへにぞしかわる月影かすきかな
けさ

左の詞いとしつまて心いとおかしく侍る各
姿ことおもしろくみけりてこふかうくる
きれいふありこうしにたる迷ぬる

各よてゐお

十五番

左　　　後藤朝臣

冬むる夜空のつきかけも秋の末よりやかて
うつらの

右　勝　　新宰相

立わたる霞のうへの月のかけもやとる浅茅の庭

様ゝ来よりこそ詞ともこそわかれぬ

さ心あるよし　各よしいはれ心あさ

ちふの庭勝ときよしゆるさる

十六番

左　勝　　　従一位藤原朝臣女

秋風のふけゆく空のかけて身にしむ露の羽おと

右　　家隆

むかしのさえぬ萩の秋の風まさる

左たゝもふ可耕よりの各よて心

の葉しらさるあはれなる

しきよしとて勝侍りき

十七番

左　持　　藤大納言典侍

おもひつゝ行かなる風のをとにまたれし夜の風の秋

こころちの

左

入道前太政大臣

秋はまの草木よりぬ袖の露我なきこにかぬかなめる

右をきも雖いと各宜請にゝ且一同と之

為持

卅八番

左 持

新大納言

むら雨はれて吹かふ秋風に草葉乱れ露かわらふ

右

従三位親子

旅風にもを吹くぬ袖の草葉に露かな

草葉三句々く露同歌々しく各

露すわるすゝし夜志くれなとれたらひ

とれく露いなふくわるふやうそとて

持と猶く見えられ侍りき

卅九番

左

小宰相督

いらすむ月よみるる草風露秋さへ玉くさらの庭

右 持

続光心

わふふこひわかる露かなの草木に秋の夕れの哀

たひれ知り月をしれと為るよしさ

御ゝ入右心ある所にも御れ有

勝之由被定仰き

廿番

左 持　中将

うす霧のはるゝ朝戸の庭にしける草にあまりける秋の白つゆ

右　九条太政大臣女

風雅
しばしとて枝吹くのく人を秋風よりもさきにちかつる萩の上露

うす霧のたなびくあさけの草にあまりける露らしくてをかしく侍を枝吹く人を秋風たりともなぬ歌も又すてかたくして持と被定仰き

廿一番

冬雪

左　勝　女房

玉葉
山おろしの秋の葉いろぬ勝のむらしくふらしく消ぬ白雪

右　為兼卿

このはなをむらくもに吹きませてかるゝありしいくへ

左哥上下相叶心詞尤足称美て謂
秀逸之由一同申之寄白雪於松悲
れけつるなるこゝろや右哥雖有そ由
左御写又雪白色妹雖ても由谷
上之右歌猶及之由申上手

廿二番

左持　　経親卿

ゆきしろむすゝきのこずゑは山の端の横雲よりぞ明てゆく

右　　家親朝臣

しらくものかゝる木末の色それはしりけるふかき夜の空

左右同科のよし両方共申の為持

廿三番

左　　兼行卿

宿り人あるかたは風の音に後て志けのまさる夜半の秋風

右　　内侍

吹しも又外山の嵐さえくれぬ雪の音に有明の比

両首ともいつまでもかゝりけるよし

各申之

廿四番

左勝　　為相朝臣

あられちる里は風まつかき夜の雪の盛しかふる志つ　下句

右　　範春朝臣

竹のはねのあらしの音はなれてきけばむかしふるさとの秋　傍か

左右文いつまでもとりいれずある風情あらく

よからしく侍よし各申侍為持

廿五番

左 持　後京極殿

吹はらふ嵐の後てよりはれて行くくもゝの一村

右　新宰相

さそふらに宇津ろふ月も見えぬそてにさえあかしのあかぬ夜

両首共無殊事為持之由一同

廿六番

左 持　従一位藤原朝臣女

わすれしの時雨の風にうつろふてゆふ日の影も山のは

右　家隆卿

風雅
うれにてまくもゐのくもけふとて時雨る山より夕日さす也

いつれもおなしさまにして持為

持之由侍き

廿七番

左　前大納言典侍

ありやなきやきけのそらさへつれなくて時雨の音もきかぬ夜

右 勝　入道前太政大臣

玉葉
夕日さすみねの時雨の一むらにみきはをわたる雲のいろかな

音きのたにれ下りつゝへあはれ心ありまさる

左のはいひしりともみえ侍りをとるへき
乃かせ松のつゝしみにもよろしきよし
中侍猶勝侍るへき

卅八番

左　新大納言

雪あられいはほにまかさはるよさむみ松におとなふみねのあらし（文）

右　勝　従三位親子

松のかせはつもりつもりてさゆる夜の松に風の音なきこと

ともによろしきこえて勝りに侍るへき

放定侍るへき

卅九番

左　持　小兵衛督

雪さえふる山のあらしにはけしくて松ふきさむき音のみそきく（於）

右　俊光卿

時雨よりあられをまさる松風をとはけしきやさむけかるらん

左右ともに人々侍て勝侍るへき

四十番

左　持　中将

風の音にしくれてふく松風の松のさむきみつ月の光

九條左大臣女

右

風ふかぬ宮けのうちはさそはれて志からのみぞ成雪

左心詞優にして左よろしきよし満

座議右もよろしく侍れとも左

勝へきよし各申して一決し侍き

四十一番　恋夕

左勝　女房

玉葉
今は涙ある人の夢にて頼むべきことをかなしき夕暮

右　為兼卿

くれまでにおもひまさりぬ待つ心ぞあはれさのかはる夕暮

左優艶にして左為秀逸のよし一同申

之右もすぐれてはよろしけれど人々猶

左をと甚難及よし申之半

四十二番

左　経親卿

さすがにしばしかけりやこの葉にもかかる涙のあはれなる

右勝　家親朝臣

ほどもなくさめて思ふ夕暮はまたなきあとの旅をかな

左指せる難右はまさるへくや心も各申

くにかお勝

四十三番

左　　　兼行卿

今もみなかりそめなれしかはふへてそ知たのみの青成る

右　勝　　内府

御代より今はのこそぬるゝはそつまをれむしるふかるゝれの元

左御製よりは和歌御しかし人へくよう

左又優なりしかはこそ勝と治定侍き

四十四番

左　　為相朝臣

あかれける御心はあるめしに雨氣はからおふるそれ

右　勝　　花香朝臣

紀なれし英はよろぬ文書にひろめ和歌の道の境

左もよろしく侍れと右猶優艶のよし

右はよろし各申侍しく為播

四十五番

左　　俊兼朝臣

恵言しらそりしむるふ心ちからあるぬ思ふぬ和歌の道の跡

右　勝　　新宰相

思ひはなりつきし今は心よりしそ雨氣のなかれかの元

左さかあるはやう小侍るとそちからかはし

紛ふすらしとさきこそはにほひきこそ紛りけや
左歌あさからぬ紛れは猶まさりてきこえし
何ことあしられ右紛まさるへき

四十六番

左 勝　従一位藤原卿女

いくとせかくるあはれなるなみかけてつまこひわひぬやとの春かせ

右　家雅卿

あかぬかな今日こそ花のかけにしてなれしきりとゆくはるのかな

左歌は心ありて優よろしきよし各申しかは左も宜しく紛れにと勝侍る

右よろしく歌定侍き

四十七番

左 勝　藤大納言典侍

ますかゞみひのうらみいくとせもすみなれなまし ためしなかりき

右　入道前太政大臣

ひとりゐて紛りやまし侍のはなもさかゆかなるもの

左哥よろしく聞えて紛れ下句なかりし歌にあらねはいとゝくやしきめに見ゆるかな

左も優りなから紛りこそまさると定　らまさるへりき

四十八番

左 持　　新大納言

待ちわひぬさもこそ月のかけろふ風の音猶あはれふかき秋の夜

右　　従三位親子

ふしわひぬ夜半のねさめに聞わひつ風の音こそあはれなりけれ

優にしもおもしろくもあれはにほひあるにもおほえ侍りぬ

心ことなる姿は侍るに似たる侍り

勝負を難決侍るのよし申侍き

四十九番

左 勝　　小兵衛督

ひとりたにこえかねまほしやいつのまのみむかしきおもひ

右　　俊光卿

今はよなかなかおもひそへし侍る事もあらは侍る由申侍

左は猶しおもひはよし申侍りうへ右

其の心おもしろきこころよし各申て左

右勝へきよし侍るのよし申侍りき

五十番

左 持　　中将

うれしさも何とかはいふやいなやあらはれにしもふかきの

右　　　九條左大臣女

いさや花さ引けつゝみえ情と言葉とを紛るゝやらん
右は風情おかしくきこえ侍りしかは
紛れとた猶めでたく優にや聞ゆる
仍て猶勝へきよし一同に申侍りき

歌合

題　乾元二年五月四日

夏夜　絶恋　庭松

作者

左　　　　　　右

女房　　　　　右中将花春

前大納言家雅　前中納言俊光

右中将家親　　右中将俊兼

九條左大臣女　前大納言教良女

左兵衛督　　　中将

右

藤大納言典侍　　　前中納言為兼

前民部卿兼行　　　永福門院内侍

新宰相　　　前中納言経親

前右兵衛督為相　　　延政門院新大納言

春宮権亮清雅　　　従三位親子

講師

読師

判者　衆議

隠作者各判之
為相卿後書詞

一番

左持　夏夜　　　女房

ふけぬるかうすき袖のゝ夜風に枕すゝしきうたて秋の床

右　　　故大納言典侍

ほのみえつる螢もかしこと乱きてく夜ある月のさしのかくえ

左方姿さやかに詞めつらしく右歌の心をかしくして難及之由満座一同申之

右方も哀に見えて侍して歎よ侍ことを
左はおよふへからさるよし各定了

二番

左 勝　範春卿

草むらの籬の露よ月おちみて秋乃夕くれかはそおかはゆる

右　前中納言為兼

月影はまた更ぬとも見えなくにみやまきの秋すはるゆおかり

右方称ともかるめしうちの心もとよよ右
しかるをこゝ侍れは左のうるはし籬の露よ月
を見るくするの秋こそ面影かはる侍る程は
秋を沈れ勝よし定了

三番

左 勝　前大納言家雅

かせの声はくらき梢よきこえて雲ふかれよれみ月夜の色

右　前民部卿兼行

秋きよし月やとれかけゆる風よるの枝は夜もなし
左のうた雲ふかくぬれりまり侍れん
夜にかせの声はきこえてやとそ侍りかとも

風あることに侍れとさきの雖よ
そあらす右歌月なし庭とすと侍や
をしりなりぬる人は并三句もいひかな
すぬよし被仰に依て以左為持

四番

左 持　　前中納言俊光

たちかへりすゝしてしのふれは涙にくもる人をむかしのあ

右　　永福門院内侍

時雨ぬとりやゆるき雲たえてきあかりよれ空ことも杉あらつきか

左哥無殊難右又有ニ心ニ一て為持と也

被定

六番

左　　家親朝臣

おりしもあれ軒のさらちる花かかりくもるさき枕に村雨のこゑ

右 勝　　新宰相

たれなむ月まてみるやかる有明の名残の影にかゝるもの

左哥且閑故よりかかり不及之右

哥不満帯ニ仍被付勝字了

六番

左　一

月きよみとこふくにすみしてたつまつもやらぬ秋の里人

後鳥羽御臣

右　勝

あけかたの風床をすゝしく月もやひかわたりすくやよはまる

前中納言経親

左歌御製中よかくもかこと侍よしき沙汰 三句もよろしかくさたより各申之右歌 すこし乃こととも不落居の由侍りしかし

左は松依之難被右為勝

七番

左

をせよなかく影のあやめかけそへて袖よすゝしき夜はの月

九条左大臣女

右　勝

ぬけかへるたもとすゞしき風立て袖にかをるゝ夜の床

右桐船臣

左は初句并三句ともよろしかるを西行ノ詞可為難 此各申之如此左さ右へし勝との由被定

左祢烟忽非可勝歟

八番

一

左　勝　　前大納言教良女

草村乃露のひかりもきえもせてうつる秋深し夜風の月

右　　定政門院新大納言

さ月やミ月なき波をみわたせハよの夏ゆくかたもしられはかなき

左ハことになるてかしなとた草もしられ

露ハ道にとに見えあさは儀も一揃と也

定申之

九番

左　ね　　小兵衛督

すきうそのなさけやミハ村雨のひかりあつむる露まのころも

右　　清雅朝臣

ゆふれつる月ハ新たに氣さしてくかるかとするやとそさき

左右ハ間優劣難定之由各申之

十番

左　勝　　中ね

月もなき南まよれその明くるは螢のけそ新かのめく

右　　従三位親子

みそさまよて秋なりし清月のよしくなりふかき秋のさかる

左哥心詞優美にして初終すこしのわろみにも秀逸とも申侍らん右又以此
心く負て相より侍まとして左於絶了
侍く哥為勝と申さしや侍るへき

絶恋

十一番

左勝　中将

おもひ絶し人の行末よしさ又もあはれは成ぬまてもおもひまさるら

右　従三位親子

うきやそふおもひしやすきも人心おもふてまたあふ人もあるとそきゝぬる

右哥めつらしき詞にて侍るを聊おかしつかうまつるへき
不や侍らん左さしたる事なくてもありぬへき
よし各申して為勝

十二番

左持　小兵衛督

[illegible]

右　清雅朝臣

[illegible]

両首雑実一変相同之由一同申之

十三番

左勝　　　　教良女

契絶えて世はあらましとなるえてもなをわかれそいとゝかなしかりけん

右　　　　新大納言

うかりける契むすびしくやしさよしらはいつもこひしきものを

右も功なる歌には侍しを左はあるまじき
いふにいはれぬはいとゝあはれにしく候して

以左為勝

十四番

左　　　　九条左大臣女

哀なる世のことはりにいつもたえし契よけれそれそめる

右勝　　　　為相朝臣

わすれまて恨はいかさへいとふ身のうきにたへぬれつゝ世をうき

左のうき世のことわりもあはれにきこゆるを
まさるをいかにゆかしや右のうへ勝字を付
らるゝ侍りしき

十五番

左勝　　　　後藤朝臣

よしさらはあはれはかりも残さしと心なからかくてさそ
おもふ

右　　　　経親卿

西行の心にそめぬ時そなき見しは小人のあはれとも

たのしき人のあはれともいはしといひてたくひと

いつはりやきこゆるよのし各よ之左の方は

なにとなく心ゆかきこ枕よ侍まゝえて勝侍

侍しかりしや

十六番

左　　　　家親卿

まことの人のつくさいなくはぬてあはれ知人はまつ世よ人てしや

右　勝　　　　彩宰相

そのほとよ枕ゆやよぬ心さいつまこゆしとそれきちいおもしつめ

井三句なきよあして末の句いかへきこゆやとそ

あらまほしきよしれは氣色とあるらしと

以右為勝

十七番

左　持　　　　俊光卿

はなさもせぬなけきこゑやあはしよ人の契の名かなかなしき

右　　　　　　　　　　　　内侍

おもひいてゝすむへき年月の影をともにすみてそ猶みる

左右ともにおもふ所ありてきこゆれは

持にしつや

十八番

左　勝　　　　　　家雅

かすかやまそのむかしの名残にも雲風ろにほふきみかよの春

右　　　　　　　兼行

ことしけれはよの影より入るかけまてきえのかさなるまてて

花はいつまてもといへるはあはれふかく猶勝侍

あさきよし各申して右勝

十九番

左　勝　　　　　　範春朝臣

おりくの家の風はしらしたれと今もやすみすいかならん

右　　　　　　兼行

いつもきくみのむかしのおほ月のたなそはこし花もなき

左歌心めつらしくすゝめのかゝりて雅意

きこえ侍れと右殊によろしききよし作者

されは勝の字をつけしまて御かた前中納言
故京明臣頗る左勝よしと申請うるよりて
持と被定へし

六番

左 持　　女房

うきことに絶てあるとも人のゆるかにとひてすくる月さへ
右　　故大納言典侍

せめて行いふこ一かたしの契ありていはけやとほとも恋しうらみも
左方右未秀歌なき多きに御ならぬかれとも
やうにおもひしれとこゝろのいありかくくや
御へ人と心肝よ染て見拠を申にかなよ
いすゆしかとに右哥嬢艶不勝のよし
え御字文持よかゆ御し小こそ

七番

庭松

左 持　　女房

夕暮の松よ吹るし風よ新くくすゝぬむかしかれる思

右　　故大納言典侍

夕せこにも新くの松よ都やとそりあけさこふけのは

移りくる村雨の空時雨もしかりして
京の気はとしちふ給ふも左文すそらうき
よし彼に似かよて持とし定められ侍りき

第二番

左 持　　花春朝臣

雨の中にしかまさりてみゆる庭の面松のもとつ葉ぬれまさりけり

右　　為薫也

年へてもかはらぬ色をたもつらし君が宿の庭の松の枝

左いはむるき深めを庭すらにいくくされて
うるはしき哥の旅やとあるまじう
次は給ふ太平を祝ふよしたへておもふ所
侍るにことたりてありて又持と定ヌ

第三番

左 持　　家雅也

菅てかりの庭に咲初て入ねけるくもつ世の思

右　　薫行也

移りゆく秋風の音もやまぬ時雨も松にのこる

左哥よろしきを入ねつくとしも侍られ松

ゆうにきこえて侍るや侍らんと申侍りし
ともかくも難きあらそひを右又心あるさまに
よろしく見え侍りて侍るへきよし定申訖

廿四番

左　俊光也

あめくもる梢のさきは雲とちてかそれなひく庭の松か枝

右　勝　内侍

吹わくる山の嵐の末うけて秋をまさりくなれの松

左方云　祥難　然らてといふ詞なる故
耳立不庶幾之由申之　彼御沙汰右方申何
なき調てといふ詞又当時常出来之由論
申之可為勝被定了

廿五番

左　持　家親卿

君かあてる枝もいく世の庭との庭に末たのめる松の一もと

右　新宰相

時すきぬ夕暮しき山里に軒なれにしく雲風の音

左方又云　歌中よけ下句さ聞載之條

頗有沙汰優被称之被成勝之

廿六番

左 勝　後鳥羽院

さりともの心の友と成よりなれて軒はの松の一もと

右　経親卿

庭まての池のさゝなみをむやとの軒は木ゝまて松かけそ見る

心の友と結心強歟甚要之由各申

左方初句亦中納言不詠之雖犯之由

申之又右勝歟

廿七番

左 勝　九条左大臣女

庭の面の一木の松を吹風よいく村雨のおとをそふらん

右　為相卿

降ぬまと松もちらせをたのめよや軒よなよなの宿の松杉

左方いく村さめのおとそきこゆらん殊勝

よりしかれと右方例祝言也て勝り

ありゆきの倍之称後見付申之若侍り

廿八番

左　持　　教良卿女

庭の面乃松の下かけ苔むして稍たけゆきし山ふかの住

右　　新大納言

かくて松入日のかけもうつろひてなりける松かけくらき庭の夕くれ

共によろしきよし衆議ありて為持

十九番

左　　小兵衛督

山ふかき庭の日かけはとりもこす木の下たけき宿の松かえ

右　勝　　清雅朝臣

新ちらし松に嵐は吹なれて入ぬくやとそさひしき

木の下しけきとて又のきの松の枝に絶てしこと木の下なる松の事聊不分明のよし沙汰に右為勝之

廿番

左　持　　中将

まけきてもいく世のむかししらぬ松かりにふるさとの庭

右　　従三位親子

こきくれしぬ新緑の松を吹しかりあらしまことに入ねの忠

右哥ハおのれくせのやさしめんとら侍
ぬるき哥のたしけもさらさらとしてと
きこえし詞く幽玄よきこころ侍を嵐
よこをふく入相の声殊に又ゆかしくそ
きこえし右ゟて読判不分明に侍

題

霞隔遠樹　羇中見花　雨後郭公

松下晩涼　山家秋月　湖上暁霧

嵐吹寒草　雪似白雲　逢不遇恋

寄神祇祝

作者　隠名

左

上　勝八負　持二点六

右衛門督法印　勝三負二　持五点

大蔵卿律師　勝四負一　持五点

右

尊熊　勝二負四　持四点

三位法印　勝負六　持四点

兵部卿僧都　勝一負一　持四点

判者

頓阿

三十番歌合　當座

一番　霞隔遠樹

左勝　右法

あさみとり霞にそひて杉むらはやかて

こゝろのうちそかすかに見えはて

右　二法

むかひの山ゝも霞こそよそにみえわたる哉

かさとりやいはすくはしらさくや

左哥ハ山に松の原の霞ぬる様

見りけしをそらうすむ優りきこえ侍

る右哥ハ一句心えかくすゑのしゐてや左

為勝

二番

左　大律

さらの砂乃尾上あらしも清かりしなき色にや
夕くれ本くらりかとみゆれ

右 勝　兼僧

舟の砂ゆよりたちのほる浦ゆ松に吹
舟くしそてはあさかとみゆ那

左右羽言乃かたちいはもみしよりく
も侍もしも右哥いまとさしゆき
下むし中色くや

三番

左 勝　上

しら露のぬ雪そそりあかぬ球そらの尼ゆ
吉やかとみそうり思へる

左　尊悠

かりしおれ人まや空ゆまもしなき色て

こゑもしかとふしむこ橘あやなりし

右哥かはし松かこ橘のにほふ柿本の
鈴風とてかくて侍もなくしたたる雪さそふ
松ゆ球しおそれこ松そかとみえ山見
そても侍と以ふたなしそうり松叶に侍
まさて勝侍るへし

四番　霧中見花

左 勝　上

むらなみくきく山路いはあくりしれこそ
をゆきてそそれ揉の庭ともかはゆれ

右　三法

宮ふかくら色すりそえ揉ゆかきゆつらん
はるのおのゆ花あくて雨の跡て

左の詞よゆしもふ侍るかゐて右花下

ゑ帰にて我もあらたりや霞中にたりても
おく次右近達筆とゝくしも何ゝ
心ゑ入るもかゝる様の歌にて何かゝ文
左為勝

五番

左ね　　　　右法

とれかてりや桜まちかねて日をくらしたれ
られしそ春の心まかりなりけれ

右　　　　せる丸

なかき日をあかぬ心に暮かねく
くもの山路にもおもひしぬ

左哥ハ縁宿は春の心まかりといへるい
かてもしこそ右哥ハ心まかりて
あら稀なし心のみなしや秋の心
ゆりなるにんとよ哉何合ハ我てりもかく
よ何ら人の右又くゆて山路おも花の
下如くあまりてりいまさうなく何らう人哥
ハ難しものゝれかくて何れも准ニ哥
為持

六番

左持　　　　大伴

いそしく遊みち我わとしれこ哥せゝる人母
られ有色ともぬ志賀むやかし

右　　　　無僧

あふ坂むや我せはより桜何せ心しも
られ有花心も何吉むせゝる人
志賀山越逢坂関路ともに色をぬ
なもみすしは何有何ゝし

七番　雨後郭公
左勝　上
むら雨のをとにめつらしくなりて木のしたかけに
なけはやと人にほとゝきすなくなれは
右　無縁
なれはほとゝきすありなけきてわかぬはかなきにほとゝきす
いくたひかなけはれにほのあたりたれにきゝたる
左哥下句あまりてはしめにほとゝきすなかり
やたり哥けはなしけれ不なく侍るとおもふ
雨をさけるこゝろなきにこそ勝にさふらはれむ

八番
左持　右法
雲のゆくあとなりぬれはほとゝきす
やまかけにいつこにゆくあすはすなれ

右　参議
むら雨のすきにしあとにほとゝきす
なくしるすいつはにさかふいはし
左哥又句まてあはれとなくにこそおもひさはれ
たれのゆくゑをかくれるになほとおもふ
とおもふにゆくなかにて又むらさめはしのほる
のはなにきこえてもいつしかはなにとかてはかり
なくゆくなる勝なりとはいはまし
かくはし

九番
左持　大僧
むら雨のあとのなかはにいつかしの明れ
右　三法
月ありかとなほはなにとかゝるの都

かはくすりゆれてゆふさまに涼しみえたれの
これわたりなのかはかりきたれ
此番一入可為持

十番　松下暁涼

左　持　　　　　右　法

山川か岸の浪くしさまにかは松ふく風に
なりとおもしろの声もすゝしき

右　　　　　　　忠續

夕はく日松か木を隔てりかゝゆ秋に
下かけもしなりぬかりいは

左哥夜のかたしあけりしさまも暮し
わかりなからやりけりさこ松かけりなる右
哥夜のつりかはもさてなくしれぬ松や
御返え松猶預不分明

十一番

左　勝　　　　　上

すゝしさをあはれ秋もゆふ涼なれき絶を
日もゆふくれなまりのしくかけ

右　　　　　　　　　菅継

松ふけく日いりぬるかゝれ山川か松り
かはぬ秋をくれの錦そすゝしきに
右夕陽も涼風も木すゑまに有りたな
又あつさめくゝ御のは小松の様てりに御
おはりかなくこそ
左詞面もとゝのはりはゝ秋てさに猶れ
日をも松ふ篇乃夜衣なとへてりから
小ゆゆ為し

十二番

左持　　　　　　　　　　　　　　　　大律
風ふけはすゑ(?)のみたるゝ女郎花しをれ
秋の野(?)のゆふ(?)くれをふかれぬ花を待(?)
右　　　　　　　　　　　　　三法
まつ(?)きゝこれにしのゝかけてきこえくり
夕日影にてか猿(?)をすくしけ(?)
左右之松不可有こゝ下矣
十三番　　　　山家秋月
左勝　　　　　　右法
山のはの月のかくりあふ(?)の影をみては
わすれ難き(?)秋月のをしまれ
右　　　　　　蔦(?)法丸
なかめしやみやまれ(?)いほ(?)あはれ(?)月
まさる(?)世の月しかへり(?)けり(?)

右哥初五文字耳なれすきこえ侍り
や章子のうたに沈(?)下てあまりて聞え
侍ぬ左哥ことなる事なくきこえ侍るを
月日のうつり行もしらぬ山里の
月にあされより秋をおもひしらるゝ哉
よみ(?)ためる(?)心をいひ極て侍るを左の
勝とや申侍へし
十四番
左　勝　　　　　　　大律
あはれをもなかき夜すからのねさめやらねは(?)
月みる秋そしみやかへまし
右　　　　　　　　　兵衛(?)
よしあれ(?)さむ(?)なつ(?)となきしれなく　通来(?)
いとゝ(?)みやま月をのこらし(?)

左依怖魔之執着判　姨山月之奥
味隠遁之心ともあらまほしくこそ侍れ
右もとよりみ山の月をはなれしこそ優なり
侍りしも病ありて侍りたりまじく為
左勝

十五番
左　ね　　　　　　　上
なすらへや何月なりしむかしの何の秋をたえれなき
われはいつへやみそしはなくやいそてまし
右　　　　　　　　　之法
みまれしまふおもひしみやまにはしめて
わかれしにもとより月はみえけん
左右ともにいてり心たに半のことの次まさりし
覚ゆれとや侍らん

十六番　湖上暁霧
左勝　　　　　　　　　大伴
何の浦まれうらのともしぬのあさまわかれ
きりてりやおもとに何あさかすみ浦人
右　　　　　　　　　　　尭然
西はるのうみやなみちもかすみ立霧も
秋の夜のあはれしもありけふの月
左歌殊妖たるのこゑし心ゆく次
侍まして左勝へきに社

十七番
左持　　　　　　　　　右法
ゆくなみやみかのわたりもさきのおもえつく
かけうすみなほあり明の浅茅
右　　　　　　　　　　　玄僧

よかのうらんやあつはまつけふゆゆれ人の
こゝろもしらてあはれ清きこゝろなれ
左右等同

十八番

左　勝　　上

なかむれは霧たちこめてうみの海や
あかんえいはくありけり九月

右　　二法

ふしのやまにそへり霧もあらはれけれ
月のみち夕日のかけもしるしの海
右はあらはれしてあまりなりたしかなり
しかもまたなみのいはくなり有明の
月影寧浮眼界風情絡所尤為勝

十九番　嵐吹寒草

左　勝　　上

あきはゝむしとそなれあまの篠の葉の
えんやこしいかやうにはかしぬれなる

右　　無俗

あきとなはむすしきあへぬ萩かもや
この葉もとなりぬあきのあはれかな
左哥古風をしらしみ志もなれあま
かはりの葉はらく不混凡俗着なる
右哥萩原やこの葉もとなりぬれしへかた
はしも心ゆらされ又左の為勝

廿番

左　　右法

白露の色きえぬるかなれの末かれしけり
あれまてもそはなる庭見あきはふ

左　勝　　　　兼熊

すれなはゝかれ葉えの萩は志かこかなれは

秋よりわらとかふかしの哉

左木枯非嵐歟右末之句雖不殊

更聊為勝

廿一番

左　勝　　　　大律

あらし吹かれ野ゝすゝきしとけえこゑ

秋みしるそれなりけりもなし

右　　　　三法

とはの萩のれ野ゝれ秋よりも

なき萩やもとしはと吹あらしかれ

右哥第一句不庶萩吹嵐かも遠

よもへのはなしかしなるへし遊

ゆふ萩やすゝきは秋よりもとけてはしはふ哥

のさこし如し而然詞かたてうゆるすりや

たかれ野ゝすゝきあれのかなりけもこと

有ありは出ゝしめてへくを如ゆ両氣を

なしとみへて哉をおはけりなくこゝ両

れと勝めてをあるれなそのるよし

ものなしおりしなさされ如きてもきこ

からゆへし

廿二番　　雪似白雲

左　勝　　　　上

あさほらまを行く人もかもありて

やまよりさそくはわか経雪

右　　　　無備

きぬふるて雪かいふりきしいきやまやまよ

おもはしきかりはいかにいつの音の雁

左哥をりにあることは数ありけるかなや
右古哥はいのなかとし雲なかくるゝそて
ゆふあけに尾上のあくありぬはしもなきえ
むそあなたの霜のおもてはつきみはし
あかつきおもかけのなくしもそ侍れ歌は
らなれの山の霜をぬきとりやうちおもれ
この侍まて勝とや申へし

廿三番

左持　大伴
夜の入ぬるとの鐘ありいきてぬしらくもや
尾上の松原のあきかせの秋の雑

右　誉能
山の鐘ありうつろふ雲にみえけるや

尾上の霜の枝にかゝる雁の声の跡

哀首ごとにいり散文句おもしろき歌なりや
非定是非

廿四番

左勝　右法
余あかりのいかに芳の夜の山ほかりゆく月は
いかしたりきこぬみゆれしらくも

右　之法
夫の雲のかゝる雨にみまたはいさ日かけ
いはやなとへまゆくさてきてえけり

右は古哥ありて秋侍り也　左為勝

廿五番　遇不逢恋

左　右法
あつしたはしのにおもひのありてつれなきを

あさぬまそえかはれならさやなりけん

右　勝　　為継

まつはらのむもとふ琴のやいさかりし
うけるかも庭すさひ月草の歌
左哥上句いむおは捨られを作るは
さりとて左と中三句殊なる次第れとも
月草の哥ノ分はりて侍るとし

卅六番

左　勝　　大律

しらまのかいとそしそりの声きゝても
今さらかへらん君かためあそのみ

右　　三法

はまなそさはおむみさあたらも玉くしけ
ぬらてこそおもふし身なすらん

右玉くしけぬれてこそおもほゆるなかにいひかはる
あけ暮はしる気はしけるて
やまいわはかへらん君あるなけのみ
公様数并しる詞花葉の作まはをくく
勝作るなり

卅七番

左　勝　　上

そまかひの川いはほのそのむら来人見
さくらの花見るはりやとはめ

右　　無僧

あのはゝのこほむかるの松あらる
お殿を川れるなきけ誠をえれ
左小野小町ヶ詠哥としてかくしゝ作
し人なのうはりやとは申く

ゑらかへゝかゐ紙葉のしげきよしもかな
ありふきこし言の葉ゆくへらむ猶ふしの夜毎に
ことみゆるむすむらしても道たえたれ
との為勝

次八番　寄神祇祝

左　持
あふくかもし次おへ乃枝に志ぐれけるた
ことはの代までと神をゆるらん

右　清
ゆるるかしなれ風に語乃なのしるむを
かはらぬ御代代ゑんきうんゆくとしは
あさえ乃をときなの花風に語ばれぬと
ゆかうし
為継

次九番

左　持
上
いりさし神代のむかしより言の葉に
そちらへてきたみの御代まで

右
之清
神さみ代くまりなりに世代のまつりてし
まかれ言ま日よしれなぐやいのらん
たたかみの木の葉てらし末の松ゆく末
代いまも名は日台れなくりかくら言
くまりなしに世代いのかかるにぶれ
ふみかけし次くにもやゆらん

次番

左　持
大僧
日よしやふりくまりぬ御代にかけきくつ言
いやまへなまむ神のめくみを

右　無僧

よろつ代の代々神もいのれとからいや
なき代のためし今日よりも見れ

凡右歌言勝負近辺并拾遺音之
亦番之、雌雄剰合點七首之金玉有
悉有憚不可不痛而已

歌合　嘉元三年三月

題

寄花春　寄月戀　寄雲雜

作者

凡

女房

新宰相

右中將藤原朝臣範春

正四位下行右近衞權中將兼春宮權亮藤原朝臣清雅

從一位藤原朝臣教良女

正四位下行右近衛権中将藤原朝臣俊榮

右

從三位親子

中将

宮内卿

永福門院小兵衛督

生覚

永福門院内侍

講師

讀師

判者

一番　寄花春

左勝　女房

なほざりにうき世をよそにすてゝかゝる花の情にそよわれてし

右　従三位親子

九重の池のみきはの花さかりなほ千代の世の春をこそしき

二番

左持　新宰相

ねかはくは春のけしきもこよひより春にほふや花にゝほふらし

右　中将

春やさらに野山に咲かぬ花をさへ梢に花にさそはれぬ迄

三番

左　範春朝臣

ありなれし雲居の宮の桜花咲まさるはな春はさそかし千代の名所

右勝　宮内卿

花を見し三春をまてとふもとのこのもとやしらぬ梢を待まつ人

四番

左持　清雅朝臣

あかすなほこゝろもあかぬ桜かへさじや花をなかさぬ春の日数は

右　小兵衛督

なべて世の花にもあらで咲めくし春はさらに来ぬと思へ

五番

左　　　従一位藤原卿女

ちらぬまは花よりさそふ春風にいくよしかくてあらしさそふな

右　勝　　生覚

よそにのみみしはなそめてこの春もむかしにかへる宿の梢に

六番

左　勝　　俊兼朝臣

春風の我身によはくすゝしけれ桜は花も咲くらん

右　　内侍

み山の霞のたなひきてくれゆく春にかへる花の色哉

七番　寄月恋

左　　女房

うらめしく山の端の月やまちえてたゝゆふくれにおもふなるらん

右　勝　　従二位親子

みる月の袖のいてこんさとの今さらにおもひしらるゝ

八番

左　　新宰相

秋の夜のさてもしらぬ月を見つゝかきりなき

右　勝　　中将

今宵よりおもはぬ袖のうきなみた月はかゝる

九番

左　　　　　　範春朝臣

待人のむかへぬ床の枕にはよなよな月の影そさしたる

右　勝　　　　宮内卿

まつとしもいふ人をまちいて月影のかけはしらみなからまこしき

十番

左　　　　　　清雅朝臣

うきことは涙のからにやつれしも月もさらに秋の影そなかるる

右　勝　　　　小兵衛督

うき人のつらさはいはし月のみそうらめや人をうらみて友にたのまむ

十一番

左　　　　　　従一位藤原朝臣女

ふるさとの月は宿にもかはらしをもりける洞のやみをさはらぬ

右　勝　　　　生覚

夜なよなの月はうらみとむ人の心みせよ人の為けなし

十二番

左　勝　　　　俊兼朝臣

こぬ人をまつとすめぬ床につきしつらさしはいは秋のよの月

右　　　　　　内侍

つれなくも人をうらみていくてむなしふかく白露をたつき

十三番　寄雲雑

左　持　　女房

うきてよの身なれるみさとかゝすきはたゝ月のまへにゆく雲の

右　　従二位親子

あらき風は岩ねもとゝにたちさはくむらくものこゝろも雲まよれぬ

十四番

左　　新宰相

後はいく暮をかみつゝ大空の雲のゆくへに又日数さへ

右　持　　中将

山さくら雲はかゝるも雲のふもとも秋は雲ものこれる

十五番

左　持　　範春朝臣

久かたのそらに星みえてはきゆく雲たえむらもかゝれ

右　　宮内卿

村雲にゆふ日のかけはゝやなから暮くむらの山のはなそら

十六番

左　　清雅朝臣

たえ〳〵とのこる雲路はてらぬ今のむかしの都なり

右　持　　小兵衛督

名ふとも又しら大空の雲にのこれるならひをそれとみるかな

十七番

左　　　従一位藤原為信女

夕暮は風に雲ある月見えてつゆちらしたる秋風のそよぐ松かえ

右勝　　　生覚

かつ見えて若よ一村雲かゝりくる光よこゆの峯たちのはけさ

十八番

左　　　俊兼朝臣

雲のゆくそなたの風に吹ながされてたちのほる旅の夕暮

右勝　　　内侍

山陰やうき夜あらし月の光くもらぬ雲の峯の外にたちの

110X
643
1